証言

未来への記憶

アジア「慰安婦」証言集 II
——南・北・在日コリア編 ❶

アクティブ・ミュージアム
「女たちの戦争と平和資料館」 編

西野瑠美子・金 富子 責任編集

中央人文 ☎262-0050
横浜市立図書館
2045001183

未来への記憶 アジア「慰安婦」証言集 II 南・北・在日コリア編 ❷

「女たちの戦争と平和資料館」
西野瑠美子・金 富子

9784750331980
1920336030009
ISBN978-4-7503-3198-0
C0336 ¥3000E
定価(本体3,000円+税)

3 風にまかせ、打ち寄せる波にまかせて、歳月はたってしまった

――吉元玉（キルウォノク）――

それをすべて記憶して生きてきたら、おそらく生きてこれなかったと思いますよ。

もう年をとっているからそうかもしれないが、ある時は、朝ごはんを食べて寝て、昼ごはんを食べて寝て、夕ごはんを食べて寝て。だからか、夜眠れなかったら思い出そうと思うけれど、想像さえもできない。したら、ああ、神様ありがとうございますと。そんな怖い話を全部私が思い出してしまったら、今日まで生きてこれなかったと思いますよ。自分一人でしゃべって、自分一人で慰めて、そのように生きていますよ、今は。

知らない人は、むしろ幸せだと思いますよ。自分が直接やられなくても、やられるのを見るだけでもぞっとすると思いますよ。子どもも産めなくて、世の中の人間がやっていることを自分は何一つできずに。普通の人間が生きていくような道ではなく、なんとなく、誰かが言ったように風にまかせ、打ち寄せる波にまかせて歳月が経ってしまいました。

1928年平安北道熙川生まれ（住民登録上は1927年生まれ）。13歳（1940年）の時に、父を刑務所から出すお金を稼ぐため満州へ行ったところ、ハルビンの慰安所に。1941年（14歳）性病にかかり帰国。1942年頃（15歳頃）中国の石家荘で再び日本軍の「慰安婦」に。1945年（18歳）仁川へ帰国。1948年頃（21歳頃）忠清南道温陽で妻と死別した男と再婚。密造酒の販売で生計維持。1954年（27歳） 既婚男性であるファン某と同棲。富川市で万屋、卸売商などの商売。1958年（31歳）養子入りする。1976年頃（49歳頃）、連帯保証により生活が厳しくなる。ファン某と別れる。1998年（71歳）、日本軍の「慰安婦」だったことを明かした。2004年（77歳）現在、韓国政府の補助金により仁川の賃貸アパートで1人暮らし。

●罰金――父を請け出すため、金二〇銭で売られたんだよ

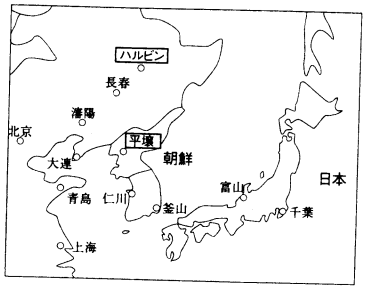
生まれたのは平北（平安北道（ピョンアンブット））ですが、幼いころに平壌市に行って、兄さんの布団に乗せられ川を渡ったことを思い出します。それだけをぼんやりと思い出すから、おそらく四、五歳か五、六歳のことかしら。

私たちは五人兄弟で、兄さんが二人、姉さんが一人、私、そして弟がいたんだよ。父はお酒をよく飲みすぎたと言えるかしら。外泊とかもよくしていたようだし。父はこのように世の中を歩き回っていたんだから。でもある日突然、父が現れたのです。父と一緒に住んでいる時は、古物商をやっていました。母は父に再会する前には、今で言うと魚屋さん、魚の行商をやっていたような記憶があります。

安東（アンドン）◆1で古物商をやるようになりました。その時に私を学校に行かせてくれました。ある日、学校から帰って来たら、家は大騒ぎになっていました。古物を売っていた時に、父が捕まったというんです。今もそうでしょう？　盗まれた物なら、それを売った人がつかまるのは当然ですよね。で、その時もそれで捕まったと思いますよ。

◆1　平壌市の安東（アンドン）。

家のことがめちゃくちゃになっているのに、学校なんか通える場合じゃなかったんです。まあ、二年くらい？　一年以上は学校に通ったような気がするけど……。兄ちゃんたちも学校に長くは通えなかったと思います。一番上の兄ちゃんは平北の熙川（ヒチョン）に住んでいたけど、結局は故郷に戻って、生活が苦しい母を助けるために頑張って働いていました。勉強する姿をみたことがないよ。



古物商をやって父が刑務所に入れられたから、勉強なんかできなかったよね。私ね、かなりふざけていたみたい。だから、どうせ妓生の道を歩むなら、妓生学校（券番）[*2]に行って学ぶべきだと。学んでいる人と学んでない人は違うから、私をそこに入れたみたい。誰かがね。

昔はチェを受けた妓生、チェを受けてない妓生[*3]というのがありました。妓生学校で学んだ人と学んでない人を区別し、妓生学校を卒業した人を「チェを受けた妓生」と呼んだの。「平壌妓生」というわけよ。そこに何カ月くらいか通って、後に兄ちゃんにばれちゃってぶん殴られたよ。私ね、ふざけていたよね。一三歳で何もわかってないのにそんなところに行くなんて。

その時、一二歳か一三歳……おそらくその位の年だったと思うよ。その位の歳で学校に通っていたある日、右手の親指にけがをしてチャング（太鼓、民族楽器）[◆4]を打てなくなった。それで妓生学校にいた女性と一緒に「出稼ぎに行こう」ということになって、妓生学校を出て満州[*5]に行ったわけなのよ。

父が入っていた刑務所の罰金は、その当時の金で二〇銭くらいだったかな。とにかくその位だと言われたみたい。それを私が払おうと思ってさ。友だちと一緒に満州に行けば金を稼げるということをどうやって知ったかもわからない。まあ、その時はまだ分別がついてなかったから、二〇銭さえ払えば父が出所できると、それだけを思っていた。それで満州に行けば稼げると言われて、友だちと一緒に行ったみたいですよ。おそらくね。売られて行ったかどうやって行ったかは覚えてないけど、とにかく一三歳の時に行ったのははっきり覚えているよ。一三歳なのに満州に行ったんですよ。豆満川（トゥマンカン）を渡って。

●横根手術――一五歳のうちにそうなってしまったね、体はぼろぼろに

満州には何人かと一緒に行ったけど、誰が誰だかも分らなかった。そこ（中国東北地方ハルビン）では、韓国人の姿は一切見れなくてすべてが日本人だったよ。日本人といっても一般の日本人ではなく軍人だったのよ。軍人だけが行ったり来たりして、すごく寒かった思い出しかない。ただ寒かったという思いしかない。

＊2　妓生は前近代の朝鮮で歌舞音曲を支配層に提供してきたが、性売買産業が異常に肥大した植民地下ではソウルや平壌を除いて衰退し、伝統芸能を継承する場として平壌に妓生券番（養成所）が設立されていた。詳しくは本巻宋連玉論文を参照のこと。

＊3　チェとは杖鼓をたたくバチであり、チャング（民族楽器）の素養を身につけたか否かということを指す。宋連玉氏のご教示による。

◆4　黄海道、平安道で歌われている民謡や歌。

そこはさ、何も知らない子どもが耐えるのには言葉にできないほど大変だったよ。そこでの最初の大変さというのは言葉にしなくてもわかるさ。おそらくそれが一番大変だったと思うよ。雇い主のおばあさんが怖かった。おばあさんが見えると軍人以上に怖くて震えたの。私はそのおばあさんを怖がってた。

まあ、そもそもそれが子どもには無理だった。それで怖がっていたかも。そこにいって間もないうちにいわゆる性病、横根という病気にかかってしまったの。横根って言って韓国語では「ガレトッ」[◆6]。(ひたすら両股間を指しながら) このように両腿にできちゃって。なんて言うか、熱もたくさん出て。それで客を受け入れられなくなったの。

その病気にかかってもう私を使えなくなったから、手術をさせたの。しかし、手術というのがとても酷かった、日本人たちは、自分の娘、故郷にいる娘だったらそんなことできないでしょう。両腿を手術し、卵管を塞いだんだよ。そういうことがよーくあった。それから二〇歳になった時に卵巣腫瘍という瘤が(こぶしを握って見せながら)、この大きさくらいの瘤が、お腹の両側にできたの。つまり、一五歳で体はぼろぼろになってしまったの。

両足に手術を受けたから歩けなくなった。悪い気運が入ってしまったから治るわけがないでしょう? なかなか治らないし、私を使えなくなったから、私を韓国に行かせたの。韓国人の男を付けて。もう私なんか使えないから、やったら騒ぎたてたでしょう。私をそこから連れ出してきた人が「まあ、無理やりにしているわけでもなく、病気にかかってできないんじゃない。そんな大したことでもないのに」と言ったの。私を助けるために言ってくれたみたい。つまり、その人が家まで連れて行ってあ

げるって言うので、何も聞かずに彼について行ったのよ。

その人は軍人だったかどうかわからないけれど、一度も会ったことがない人なのに、私をそこから出してくれたの。その時は、証明無しには出入りなんかできないところなの、あそこは。今でいうと旅行証明書とか住民登録書とかだね。その人を保証するものが必要でしょう。その当時もやはり、私が一人で中国に行きたいから勝手に中国に行き、満州に行きたいから満州に行けるというものではなかったの。その当時も、いわゆる管理する女性、ヒモと呼ばれる女性になにか証明を見せろと言われて、それで証明したら外に出してくれたの。とにかくまたそれだけ思い出す。

●帰郷——もう、そういう所には行かずに

私が満州から戻ってきてからも、母が魚を売っていたのは覚えています。私が病気を抱えて家に帰ってきて間もなく、姉さんは嫁に行ったみたい。どんなに働こうが米飯ではなく昼も夜も粟飯。麦飯でもなくて粟飯。姉さんは嫁に行って家にいないから、幼くても私がかまどの前に座って昼夜、粟飯を炊きまくったからね。

＊5　中国東北部のこと。一九三一年九月、日本の関東軍が満州事変を起こして満州全域を占領、翌三二年三月「満州国」を建国した。元首は愛新覚羅溥儀(清朝最後の皇帝)であったが、実際は大日本帝国の支配下にあった。

◆6　ガレトッというのは韓国の餅の一種だが、ここでは太もものリンパ腺が腫れた症状を指している。大抵、リンパ腺が腫れることは性病が同時に現れたという証拠である。

薪がないから、木の枝を拾いに行ったりしたよ。家の近くに日本人たちが銃を作ったりする部隊があった。家はとても貧しくて大変だった。もう満州のようなところに行かずにここで稼ごうと思って、おそらくその部隊にも通ったりとかもしたよね。

朝から並んでいるとお年寄りも子どももいたの。その日に働ける何人かの名前が呼ばれて、部隊に行くと帯を一つくれるわけ。それなしにはどこにも動けないの。弾丸を作ったり銃を磨くのに帯を使うから。

妓生学校に一緒に通った友だちにも会った。部隊から何時ごろに出てくるかを知って友だちが街角で待っているわけ。それで自分たちの服を貸してくれると各営業所に行って歌を歌ったりとかするの。今は、女性たちはかなり活発でしょう。昔は、妓生学校に通っている人は戸を開ける姿から違った。だから、そういうところで友だちに会ってあれこれ話しているうちに、私たちそこに（中国に）行こうと話が出たのかも。中国に行けば楽に暮らせる、金もたくさん稼げると言われたから、おそらくそっちの方向に。だから、もうそういうところには行かないと言ったくせに、また行ってしまった。

●再び中国へ――二回目も知らないまま行った。知らなかったからこそ行った

鴨緑川（アムノッカン）を渡って北地（中国の北部）にいった。友だちと二人で行ったみたい。友だちに何月何日に出発をすると言われて、平壌駅に行ってみたらものすごい人たちが集まっていたよ。まあ、みんな私たちのような人だっただろうね。

私たちは妓生学校に一緒に通った者で、今でいうと居酒屋で歌ったり酒を売ったりすることだと思

ったわけよ。ああいう所ではないと思った。だから、私はちょっと鈍かったか、馬鹿だった。

直接行った人も、そこに入るまでにはそこがどういう所か知らなかったから（家の人が）知るはずがないでしょう？　全くそういうところだとは思わなかった。二回目に行った時に何も知らないまま行ったのがどういうことかと言うと、一回目に行った時はそういうところですごく苦労をしたから、まさか二回目もそういうところだとは思わなかった。知らないから行った。

最初に満州に行った時は、何も知らなかったから行けたけど。それで故郷に戻ってきてからはそこには行かないと思って、部隊まで通って働いたのに。またなんで中国に行ったのかしら。

私が中国に行くのを、母は知っていた。私はそれに気づいていたの。なぜなら、私が家を出る時、母がチョゴリ（オレンジ色の布を指しながら）はこの色がいい、この色の下は緑のチマがいいと、うん～、チマを買ってくれたの。でも、なぜそれを買ってくれたかさえも思い出さない。そうね。歌いに行くと言ったからチマ・チョゴリを一着買ってくれたかもしれない。

その当時は、私のチマ・チョゴリを買ってくれるほど家は裕福ではなかったし、父も刑務所から出たばかりで、姉さんも嫁に行ったから、何かを買う余裕はなかったはずなのに、歌いに行くと言ったから母が買ってくれたかもしれない。だから、南北が統一して母に会えたら、そのことを一度聞いてみたいけど、もう六〇年も経っているから、母と父は亡くなったと思うよ。（しばらく沈黙）

私一人だけ行ったのではない。そこがナマチャン[7]であったかソッカチャン[8]であったか、はっきり覚

◆7　ナマチャンは中国のソッカチャンの近くにある村であると推定される。

えてないけど、何人かで行った。「トキワ」[9]に入ったんじゃなくて、そこで一晩過ごした。最初に出た食事は白いご飯に牛肉が入っている味噌汁。それを思い出す。

普通は、味噌汁にはほうれん草を入れて作るけど、そこには牛肉が入っていたよ。大きく切った牛肉ではなかったけど、それをいただいた。

どんなに美味しいかと思って食べていると、なんでそんなに涙が出てくるでしょうね、母と父のことを思い出してさ。は～、私が白いご飯に牛肉が入っている汁を食べているのに、家族たちは何を食べているんだろうと思って。きっと粗米ばかり食べているんだろうなと。だからか、それを食べられなかった。車で移動して疲れていてお腹も空いているはずなのに、何も食べずに家族のことばかり心配していたの。私がそんな状態でいたから、私と部屋を使っていた人たちもみんな泣きそうな顔をしていた。

また、そういうところに行ってしまったことは、そこに行ってわかったの。だからか最初にそこに入った時にほうれん草の汁を作ってくれた人は、そこには行かないと言ったんだろうね。行かないといった時までは、韓国人の男もいたんだよ。だから「行きたくなかったら、どんな方法を使ってでもその男にお金をたくさんあげなくはならないんだけど、どうやってお金を払うかい」と言われた。そういうふうに私を脅した。それで仕方なく、「私がこれから行くお店は歌を歌うところですか？　お酒を売るところですか？　何をするところですか？」と何回も聞いたら、「お酒を売る所だと言ったでしょう」と怒られた。

●トキワ――昼間にも客が押し寄せてくると仕方がなく

行ってみたら水商売なんかはやらないで、なんかね、一般人は全然いなくて、来る人はもっぱら日本人ばかり。私がいたところは「トキワ」という名前だった。私が反抗ばかりしているから、「お前に反抗する資格なんかない」と、持ち主に憎まれたようだ。

自由はなかった。外出なんかも全然できなかった。昼間にもそういう人たちが押し寄せてきたら仕方がなく……。そういう人たち、いわゆる軍人たちが来るのは、大体は朝ではなくて午後から夕方までがもっとも多かったような気がする。午後から夕方までがもっとも多いというのは何かというと、朝寝坊をして化粧なんかが遅れていたら、私たちを監視する女に付け回されて、「今、何時だと思っているんだ。まだ化粧ができてないでどうするんだ。そんな顔で客に接待なんかできるもんか」と怒られた覚えがある。

化粧ができたらお店に座らせるの。ずらっと……。このように。今でいうとホールのようにしてテーブルの端っこの方にぐるっと椅子が並べてあって、そこに座っていたことを思い出す。

そこにはこのように客の様子を覗う女がいるんですよ。その女は客の行動をみると、その客が誰を気に入っているかがわかるから。それで「○○さんは△△の部屋に行って」と。各自の名前を呼ばれ

◆8　中国北部地域の地名であり、日本の軍隊がたくさん密接している。

◆9　吉元玉が入れられた慰安所の名前である。

たら、それぞれの部屋に向かうんですよ。するとまたホールに出て椅子に座っている場合もあるけど、それは稀なこと。私が体を洗う前に客が入ってくることもあって、すごく大変だった。

おそらく部屋に入ってくる時に、軍人たちは切符を買ったみたい。それを見せたら部屋に入れたみたい。それで私たちのところには切符だけを持ってきて、私たちはそれをもらって切符売り場に返却しなきゃいけなかった。お金は一回ももらったことがない。

日本人の客の中でお酒を飲んでない人はあんまり怖くなかったけど、お酒を飲んで入ってきた人はどんなに怖かったか……。酔っ払っている人の声がしてその人が部屋に入ってくると、ひたすら怖いだけ。ああいう人は私の所に来ないでほしかった……。今もそうよ。今も酒を飲んだ人は怖い。

●暴力――わっと人を殴りつけた人も、自分の欲を満たすためにあれをした人も

早く終わらないで人をイライラさせるのが一番困るんです。長くて。人は死ぬかどうかという時に、自分の欲を満たすためにそういうことをやるから辛い。

何人ぐらいが来たのか、数えられない。一人、二人くらいだったらそんなに辛くなかったと思う。ある時は本当に、体を洗えないくらいやられるの。血が出たり本当に耐えられないくらい痛いから反抗なんかするんだけど、そうするとすごくぶん殴られた覚えがある。やられたことを思い出すだけでも怖くてとても辛いけれど、反抗したからこんなに殴られたかなと思う。

（頭のてっぺんのところに残っている傷跡を見せて）これはさ、日本兵に殴りつけられて……今でもこんなに傷跡が大きい。服が血まみれになって、ろくに服を脱がせず破いたんだ。それを想像してみてください。（涙を浮かべながら）そんなにひどく殴られて傷になったということを。今はただ話しているだけだけど、それを想像すると、私も人間だからさ、当然そういう人を憎んでいた。憎んだ。だからか私はどうしてもそういう人のことを思い出したくもない。私は、は～、忘れようと。

もうやられっぱなしはいやだから、このまま死にたいと思ったことが何回もあった。なに、一回で人を殴りつけた人やしんどく時間を延ばせながらやったりして、人を辛くした人もさ。

ところでさ、私はなんか愚鈍なところがあったみたい。逃げた人もいたし、逃げた人が捕まえられてぶん殴られたのも記憶に残っている。しかし、私は逃げ出そうと思った記憶がない。ただ、これから「どうすれば故郷に帰れるか」、「どうすれば持ち主に気に入られて故郷に帰してもらえるか」、そんな愚かなことを考えたみたい。

例えば、三〇人の女性の中で一人でも逃げたら、残っている女性たちはみんな殺されるのと変わらない。一人が逃げたら、残っている人が逃げた人以上に辛い思いをさせられた。もう自由はなくなる。一言もろくに話せずにね。「起きろ」と言われたら起きなければならないし、どんなに具合が悪くても悪いと言えなかった。常に逃げ出す人がいた。今は何もなかったように言っているけど、もうその当時のことは考えるだけでも恐ろしい。

それでも、日本人の中にとても良い人が一人いた。その人はお金を払って私の部屋に入ってきて、もし私が大変そうに見えたら私に近づかないで、「漬物やキムチはあるかい？」と聞く。それから、「それを作ってくれないか？」と言うの。でも、白菜もヤンニョム（合わせ調味料）もなかった。白菜に塩、なんだったっけ、塩辛いそういうのは全然なくて。ただニンニクやネギやそういうのがあれば持

ってきてとその日本人に言うと、少しずつ持ってきてくれたの。それで、持ってきてくれたものでキムチを作ってあげると、持ち主にまた怒られた。余計なことするなと。コッソリとそういうことをやってあげると、その日本人が軍人用の布みたいなものを持ってきてくれたり、歯磨き粉や歯ブラシなどをくれたの。そういうのをしょっちゅう持ってきてくれたの。そういう人もいた。だから、世の中の人々には、韓国人も日本人も朝鮮人もアメリカ人もみんな同じ。ただ、その中で、少し良い人もいるし、悪い人もいる。そうみたいですね。

その人の名前が何だったか思い出そうとしても思い出せない。ところが、私の名前は忘れてない。どうしてか……。私は「よしもとハナコ」と呼ばれていた。その私の名前と「トキワ」という名前だけは覚えている。それ以外は一つもわからない。

●コンクール大会——みんなが推薦してくれたので、私はコンクールの大会に出ました

その時は声がとても綺麗だった。このように座って歌を歌っていたら、必ず人々が集まると言われるほど声がよかったんですよ。人々の推薦で、私はコンクールの大会に出たんですよ。人々の推薦がないと出られないところなのに、コンクールに出た覚えがある。

今でいえばのど自慢大会みたいなもの。そういう人たちばかりがたくさん集まって、看板とかを掲げた店、私がいた店は「トキワ」だから、別のもう一つの名前があったんですよ。

コンクールに出て、どの店から来たと言うからわかるでしょう。それまではそういう所にどんな店があったかは知るはずがなかった。ほどよい店はすべて、名前のある店はそこに参加していた。

「トキワ」という店からは、私一人だけがそこに出たの。私がいた店は結構規模が大きかったのに、私一人しか出なかったみたい。歌った人は三、四〇人、いや、四、五〇人くらいだったかな。日本の歌を歌ったけれど、今は最初のところしか覚えてない。「ハルヨ、オトメヨ、オトメヨダ」[◆10]

見に来た人は軍人だった。軍隊の中だったか外だったかわからないけど、世の中の一般人ではなかった。すべての人が軍服を着ていたみたいだった。女性たちが出てきて歌うんだから、そこには女性たちがたくさん住んでいることがわかった。その大会には何十人の中で一人か二人か選ばれて出たと言われていたから、この近くには私みたいな朝鮮の女性がたくさんいるということがわかった。そういう所に出なかったらわからなかったかも。

●悲報——親が亡くなったと言われて、そこから出たくない人なんかいませんよね

中国にいた時に家に手紙を送ったようです。だから父が亡くなったことがわかったんですね。手紙のやりとりがあったから。三四年だったかしら。その時父が危篤であるという手紙も届いたし、死亡したという悲報も届いたんですよ。

そんな状況だったから、家に帰りたいと言えば帰らせてくれると思ったんですよ。なのに（持ち主が）目を大きく見開きながらいきなり「何を言ってるんだ。帰ったら、いつ戻って来るんだ」と。それで一言も言えずにバカのように泣きまくったんです。泣くのが一番の武器でした。親が亡くなった

◆10 「春よ、乙女よ」という意味を持っている日本語。

と言われて帰りたくない人なんかいませんよね。

どんなに薄情であっても、交通費だけでもくれたらそこを出たかった。だけど、出られなかった。（表情を崩しながら）お金も持っていなかったし、お金もくれなかったし、故郷にも帰してくれなかったし、とってもとっても憎んでいた。そういう話を聞いてからは二度と家に手紙を出したことがない。

そういうようにして時間が流れて、どうにか八・一五の解放になったけど、解放されてもそれか良いことがどうかもわかわず、「解放だ！」という気持ちもなくて、ただ、はかなかった。とっても。

●解放――沢山稼いで帰ると言ったけど、もう二度と帰ることなんかできなかった

戦争が終わったと言われたけど、何の感情も生まれなかった。解放になったからといってすぐ出られるわけでもなかったから、私たちは外には出られなかった。「何時出発の船がある」という話を聞いて、その船に乗るために張り切ってそこを出たの。仁川（インチョン）に着いたけど、すぐ陸地に上陸できなかったのはコレラか腸チフスという病気が流行っていたから。海の上で二週間くらい泊まっていた。

二週間くらい船の中に閉じ込められていて外に出たら、お握りかご飯か、とにかくそれを三〇銭か三〇〇銭か分からないけど、お金を払ってそれをもらった。この韓国という国でね。それからジャンチュンダン公園に私たちは集結させられた。その時は、北朝鮮に行きたかったら行けたし、南朝鮮に行きたかったら行けたの。しかし、そこを一緒に出た女性三人で、「私たちが一文のお金も持たずに手ぶらで帰ると歓迎してもらえないから、何カ月かでもお金を稼いで帰ろう」と話して、行った所が天安（チョナン）だった。

三カ月くらい稼いでから帰ろうと思って。一緒に行った友だち三人も同じ事情だった。しかし、何カ月も経たないうちに帰れなくなった。行ったり来たりすることができなかった。

天安に行ってさ、今で言うと接客婦だよね、店で歌ったり酒を注いだり、客が来たら順番に歌うんです。稼げると言われて行ったけど。その当時は痛みというのがあったから、友だちと一緒に映画でも見に行って、悲しい場面が出たら大泣きしたの。それから店に入ったり、中華料理屋に行ったらコーリャン酒でも飲んで酔っ払って道に倒れたり。したら、友だちが連れて行って体を洗って着替えさせてくれたり、そんな生活を送っていた。

●結婚生活――飲み屋

それから女たちを連れて飲み屋に通いながら給料をもらった。給料は少なくなかった。でも、それだけを考えたのがまずかった。店に出て歌でも歌おうとしたら、服もたくさん必要だし化粧もしなくちゃいけないことを全然考えていなくて。給料をもらってあれこれ使ったらお金が貯まらないんですよ。そういうところばかり通っていました。それからオニャン◆11のシンチャン里という所に行って、本当にヤクザな人、奥さんが死んで息子一人いて、母は中風になって七年目という男のところに嫁に行ったの。もうこういう生活はやめようと思って。

最初はああいう人と一緒に住むと、ご飯くらいは食えると思っていたの。ヤクザだから。飲み屋で

◆11　忠清南道牙山市の温陽。

は酒を注ぐだけでもどんなに大変なのか知らないでしょう。そういうのから逃すために（苦労をしたくないから）あの人と一緒に住めばヤクザだからバカにはされないと思った。その時は六・二五（朝鮮戦争）前だったから、私が二三歳になった時に六・二五が起きたからおそらく二一、二歳くらい。

夫は、一度家を出たら一〇日も一カ月も家に帰ってこない。その上、一人で帰ってくるのではなくて女も借金も持ち込んできた。すべての悪いことをやってたの。その間、私はどうにか生きていかなきゃいけないから、木を拾ってきて炊いたり、ゴミを拾ってきてそれを精米所に持っていったりしたけど、三日分のご飯も作れなかった。

米一斗を買ってきてお酒を醸したけれど、中風に当たった姑に麹をどうにかしろって言われたの。酒粕をどうやって醸すかを口で教えてもらって、お酒を造って売った。もやし汁を何の味付けもしないで作ったけど、（人々は）そのままでもよく食べてくれたの。それで儲かった。

五、六年経った頃かな。そんなに苦労して生きていってもどうしても生活がよくならないから、仕方なくあの家から逃げたの。また、そういうところ（飲み屋）にしかいけなかった。そういうところにいる頃、夫は私を探しに歩き回ったみたい。富川（プチョン）まで探しに行ったらしい。

●子宮の手術――とにかく残酷なぐらいしつこいですよ、私の命は

お腹が膨らんで、こしけが下りて何回も産婦人科に行って診察を受けたら、こぶ（腫瘍）ができたようだと言われた。治療を受けずに、後でキリスト病院に行ってみると言ったらそれはダメだと。これ以上我慢したらいけない、手術を受けなければいけないと言われた。それで手術を受けることにしたの。

両側にこぶがついていたけど、横根手術をしたときに、ラッパ管を塞いでいたから、それがこぶになったんだよ。（両こぶしをお腹の下に付けながら）このくらいのこぶがラッパ管の両側にできていたの。それを取り出さないといけないから、仁川のキリスト教病院で手術した。その時が二八歳だったかいくつだったか。とにかく、そのこぶを取り出したの。

どんなに寒かったか。寒い時に手術をしたからか、とにかくとっても残酷なくらいしつこいよ、私の命は。その時、手術を受けてから点滴注射をしてもらったけど、その点滴注射が硬く凍っていてさ。その点滴注射を一〇〇〇ｃｃか一〇〇ｃｃくらいしたら、体中が真っ黒になって死にそうになったの。それで体が震えていたから、担当の医者たちが入ってきてさ、「俺たちはミスなく無事手術したから、お前たち（点滴注射をしてくれた人）が責任をとれ」と騒ぎ立てたんだ。騒ぎ立てても仕方がないでしょう。だって、凍っていた点滴注射の一〇〇ｃｃはすでに体の中に入ってしまったんだから。それを止めても震えていたから死ぬに決まっているでしょう。死ぬでしょう。ハハハ。それからともかく注射一本も打たれずに一週間くらいで退院した。九日で退院したかな。とにかく。

退院して、夜中の四時くらいになるとすごくお腹が空いてきてさ。お腹が空いて我慢できず涙ばかり出た。その泣き声が外に聞こえないようにしていなきゃいけなかった。大家さんは本当に熱心に看護してくれたの。だから、夜中に女が泣いたりすると大家さんに迷惑をかけることになるでしょう。だから、私はそれを顔に出したくなかった。すごくお腹が空いて我慢したくても我慢できないから涙が出てまって、布団の中に入っても涙と泣き声は止まらなかった。それからどのくらい経ったか分か

らないが、空腹感は消えていたけどね。よく我慢して生きたよね。

●同棲――その人も

それから梧柳洞（オリュドン）◆12、抱川（ポチョン）◆13の営業所に通いながら、歌ったりして生きたの。その時は、体を売ったのではなく、歌を歌って生きていたよ。やがて抱川で、歌を歌って稼ぐのは罪にならないと思って、三男一女の子持ちの男に寄食したけど、とにかく私は運が悪くて、彼は本妻のお金で生きていけないから私のお金で女遊びをしたんだよ。

その時、彼は電気会社で働いていたけど、電気会社の給料って少なかったよね。その給料で四兄弟に勉強もさせなきゃいけなかったし、六人家族が生活をしなきゃいけなかった。彼にあげるお金がなかったのよ。しかし、私は生活力が強かったの。生活力だけは誰にも負けないの。

彼からお金をもらえなかったら部屋に入ってコンロをつけるの。それから私は死ぬよって。私が死ぬと私だけではなく子どもたちも死ぬんだよって脅迫するの。は～、全部言葉で表現できない。そこで経験したことは言うだけでぞっとするの。どんなに息詰まったか。その原因が何かというと、今の人々は子どもを生まないけど、それは駄目だよ。私が思うには、なぜ子どもが要るか、なぜ兄弟が要るか、なぜ親が要るか。家族や親戚がないと、保護者がないとどんなに力を使おうとしても使えないの。友だちとどんなに親しくても友だちは友だちに過ぎない。家族や親戚ではないから力がないのよ。そういうふうに人生を送りながら子どもたちを育てていると、夫が帰ってこないのかな。自分の子どもを育てているんだから。

●息子との出会い――天のお父様、感謝します。私みたいに取るに足らない者に子どもを与えるなんて

たぶん、私が三〇歳くらいになった時だと思いますよ。町に不祥事や葬式があった時には、しょっちゅう手伝いに行った。遠慮せず手伝いに行った。ある日友だちに、「今、サンチョン病院で頼りがない人が子どもを産もうとしているのに、医者がへその緒を切ってくれない。私たちでも行って切ってあげないと」と言われた。それで毛布などを持っていったら、産婦が壁に向かって横になっていたの。食事を作ってあげたら汁には手をつけずに、醤油と一緒にご飯を全部食べたの。つまり、この人は、人々が子どもを他人の家にあげることに気づいていたようだった。

友だちが私のところに寄ってきて、「お前、今こそあの子どもを拾ってきて育てないと、お前は一生この家の鬼になるよ」って。あの子どもを育ててみなさいと。そうしたら同棲している男は絶対来ないだろうと。私はその言葉に引かれてその子を連れてきたの。

どんなに貧しくてもその子どもにはおもちゃ（銃）を買ってあげたり、乳母車を買ってあげたりしたの。自分には靴下一足も買えないのに。戸籍にも登録しなきゃいけないから、この子をあの家の戸籍に載せようと思った。それであの家の戸籍に載せてあげたの。名前はファン○○と名付けたの。彼がファン氏だったから。

◆12　ソウル市九老区の梧柳洞。
◆13　京畿道の抱川。

家を売ってもう富川を離れようと思った。私が連れてきた子どもだけを連れて離れようと思ったけど、私は生活力が強いからお金のやりくりをしたわけよ。人に金を貸してあげたり、ドルの売買をしたり。貸してあげたお金をもらうためにあちこち回ったりした。そういうふうにしたら富川からは離れられずに時間が経ってしまった。そういうふうに生きていた。

ある日、他人の保証人になったのが問題になって、財産を全部なくして借金を背負わされたの。それで、（ファン氏は）もう私から取るお金がなくなったから、住んでいる家を売りに出してしまった。ところが、すぐに家が売れるわけがない。私は家の契約書を渡さなかったから。だから内金などはもらえなかった。契約金くらいはもらったかな。

友だちは、「あんた、まあね。あいつ（ファン氏）に少しお金を取ってあげて良いようにしちゃってよ。あんたがどこに行こうが、あいつはあんたを見つけ出したでしょう。あんたをほっとかないから。家が売られたという話を聞いたらあんたをほっとかないから、（ファン氏に）少し（金を）取ってあげて、あなたはまあここにいてよ。知り合いに頼ったほうがいい」と言いながら、私をここに引き止めたの。そして、家は売られた。人の愛人として生きて、その夫に慰謝料をあげたという人は、おそらく韓国で私一人しかいないだろう。

それで、借金とかを全部返済してしまったら、手に残っているお金はない。その時から露店をやった。店も持たずに、ただ道路に座ってさ。さなぎまで売ってた。とうもろこしや卵をゆでて売ったり。（泣きながら）さなぎも売ってたし、商売になるものは全部やりながら、子どもに教育を受けさせなければならない。私はあまり学べなかったけど人の子どもをもらってきて教育させないといけないと思っ

てさ。一万ウォンあっても自分の洋服なんかは買わずに、友だちにもらったりして生きてきた。こうして生きてきたから、それでも神様が、私たちの神様、愛する神様が祝福してくれてさ。

（息子に）神学大学を卒業させて大学院まで行かせたんです。それで今は牧師になっている。息子の授業料を用意できたことがなんて嬉しかったか。私一人だけで誰もいない部屋で、天のお父様、ありがとうございます。私のような無知な人間に息子を授けてくださって。その息子のためにこのように学校を、さらに大学まで行かせてくれるなんて、これはなんという幸福でしょうと。ただ、ありがたく思ってさ、部屋に一人でさ。そういうふうに過ごしたのが一昨日みたい。

●ばれる――嫁が、私が話しているのを聞いて、それは一体どういうことですかと

テレビで「慰安婦」の補償問題についてやっていて、補償金額が少ないとかで騒いでいたんですよ。そんな不愉快なことが出てくるから、私が、実際に金をもらうべき人は恥ずかしくて口止めまでしながらかしこまった様子でいるのに、そのようにとんでもない人たちが騒いでいると言ったら、嫁がそれを聞いて「お母さん、それは一体どういうことですか」と言った。

たくさん泣いたの。息子は泣き声で、そんなに苦労をしながらも今日まで生きてきたのは奇跡のようだと。それでたくさん泣いたのよ。以前は、どんなに立派に育ててあげても私に良くしてくれなかったのに、それを知ってからは私に良くしてくれた。牧師（息子）さんが来て部屋を掃除してくれたり、食器洗いをしてくれたり。

ここの福祉館もボランティアさんを派遣するって言っているけど、まだ私は少し動けるから人に面

倒をみてもらうのは良くないと思って断った。自分でやりながら過ごしている。

●願望――一言でもいいから謝ってほしい。真実を込めた謝罪の言葉を言ってもらうのが願望です

たまに驚くんですよ。蜂に刺されたようにチクチクするんですよ。足もあちこちチクチクするんですよ。ある時は、頭がガンガンしたり頭痛がひどい。言葉にできないくらい痛いです。それでも、誰も私を患者としてみないの。医者だけが、私に体に気をつけろと言うだけ。今、医者が言うとおり悪条件は全部そろっている。コレステロールも持っているし、糖の数値も三〇〇近い。二七九だったっけ。骨粗鬆症も持っているし。骨粗鬆症を持っているのは当たり前だよ。なぜかというと、若かった時に子宮全体を取り出してしまったから。つまり、女性にあるべき子宮全体はすでに三〇歳の時に取り出してしまった。（お腹を指しながら）大きい手術だけでも三回もやったんですよ。

（手術の跡を一つ一つ指しながら）ここは胆石、ここは腸が癒着、ここは胆嚢の停滞。うん、そう。胆嚢は全部取り出したのよ。これは四〇歳の中盤にやったかな。このように傷だらけなのに、（笑いながら）恵まれたんだよね。人が見ても病人のようには見えないから。

あの時は、物心がつく前だったから、「家がとても貧しかったから。国が貧しかったからではなく、私たちが力を持ってないからこのような苦痛を受ける」と思ったわけ。でも、現実をよく見るとそうではなかったのに、力を持ってないと思っていた。どの親でも子どもをそういうところに売る人はいませんよね？

その時はまだ幼かったし、何もわからなかったし。だから「あ～、お金持ちの家に生まれたらこんなことが起きなかっただろう」と、そう考えもしたんだけど、今、年を取ってから考えてみたら、今も韓国人はお金を手に入れるために悪いことをする人がいるじゃないですか。そこに同意してしまって「行くところがない人を連れてきてそんなに苦痛を与えたかな」と思うんですよ（ため息）。

本当なのよ。国は絶対あるべきなの。国なき国民は生きていけないよ。死んでしまう。

もう残りの人生ってあまりないから、そのうち恨でも解かれたら……。一言でも謝罪の言葉を、真実が込められている謝罪の言葉を言ってもらうのが願いです。

ああ～、かれこれほとんどが死んでしまったけど、生き残っている人にただ一万分の一でも一千万分の一でもいいから、一言で借金を返すということわざもあるように、生き残っている人に謝罪して、私たちのせいであなたたちの人生がだめになったけど許してくださいと言ってくれたら、どんなに嬉しいかな。

（もう一つの願望は）挺対協（＝韓国挺身隊問題対策協議会）がこんなに努力しているんだから、国民たちが力を合わせて記念館（「戦争と女性の人権博物館」のこと）を早く建ててくれたらいいなと思う。なぜなら、子持ちの人は世の中で名前を残して、子どもによって名前を残して死ぬけれど、私たちのような人は名前も名字もなしに世の中に生まれてたくさんの苦労をしてそのまま死んでしまうでしょう。名前も名字も残らないでしょう。しかし、ここにこのような記念館を建ててくれれば名前が残る。どんなに恥ずかしい名前でも残るから。

あぁ……、私たちのよい神様、これをちょっと。たくさんの人々の心を感動させて、早く本当に記念館が建てられて、それで名前だけでも残したいと思いますよ。名前を残す道がない。本当に親戚な

んかもいないし、子どももいないし。この世の中に私一人です。早く記念館を建ててほしいというのは、私は一人だから。私一人しかいないから、私が死んだら何もないでしょう。このまま死ぬのは、本当に本当にくやしい。だから、それを建てて名前を残したいということだ。

（調査：崔キジャ／翻訳：李麗花／整理・補注：西野瑠美子・金富子／出典：韓国挺対協『証言集Ⅵ』）

《整理者の補足》 紆余曲折の末に生まれた吉元玉の物語

吉元玉の物語は散々紆余曲折した末、この本（『証言集Ⅵ』のこと）に載せられるようになった。二〇〇二年の五月にこの研究チームが初めて立ち上がった際に、吉元玉の口述作業も一緒に始められた。私たちは最初にこのチームを立ち上げ、日本軍の「慰安婦」問題に関する学習やインタビューのコツ、テープ起こしの作成ルールについて議論を行った。その後、私たちは全国に散らばって日本軍の「慰安婦」女性らの話を聞き、ソウルに再度集まり各自担当している口述作業の進行状況について、一緒に討論する形でチームを運営した。

作業の初期のころに吉元玉にインタビューをしてきたチームのメンバーが「彼女は慰安所に二回も行って来た」という話をした時、私たちは少なからず衝撃を受け、彼女の過去の人生を非常に知りたくなってきた。しかし、私たちはテープ起こしをしたものを読み討論をしていく中で、「慰安所に二回も行って来たという衝撃がチャラになるほど」吉元玉の記憶は貧弱であると判断した。私たちは吉元玉にインタビューをしたチームメンバーに「吉元玉が六〇年前の記憶を現在の方により

多く引き出せるように積極的にインタビューをすること」を要求し、三回目のインタビューには私が志願してインタビューを行った。しかし、吉元玉は過去の記憶をなかなか引き出せず「それを全部記憶して生きてきたらおそらく生ききれなかったでしょう」と繰り返した。

私たちは、吉元玉の物語を読者たちに聞かせてあげるために、あるいは六〇年前に明白に存在したが記録されてない日本軍の「慰安婦」問題に関する〈証拠〉を見つけるために、より豊富な情報が必要であると考えた。したがって、私たちは、吉元玉にインタビューを行ったチームメンバーに、追加インタビューを続けることやテープ起こしの作業を丁寧に行うことを要求した。しかし、相変わらず吉元玉の記憶は貧弱過ぎており、沈黙している口述者と口述者の記憶を引き出させようとするチームメンバーらの要求の間で、吉元玉にインタビューを行ったチームメンバーは徐々にくたびれていった。結局、この本の出版作業が始まってから一年半くらいで、吉元玉にインタビューをしたチームメンバーは、本に彼女の話を載せるのを諦めてしまった。

その後五カ月が経った二〇〇四年二月の末頃に、私は吉元玉にインタビューを再び補充するようになった。二〇〇四年二月は、インタビュー作業はもちろん本に載せる編集本、編集後記などすべてを完成し、総論の議論も最後の段階に至った時であった。このように遅れて吉元玉のインタビューを補充し彼女の話を本に載せることにしたのは、他でもなく吉元玉に対するチームメンバーらの道徳的な責任感のためである。

最初に吉元玉にインタビューをした二〇〇二年六月ごろであっても、彼女は自分が日本軍の「慰安婦」であった事実が周りに知らされるのではないかと胸を焦がしていた。インタビューが行われている間に外から変な音でもしたら、話を止めて外側を気にしたりした。このような彼女がこの口述作業を通して韓国挺身隊問題対策協議会（以下、挺対協）と連絡がつき、さらに挺対協主催の行

事に参加するようになってから、少しずつ変わり始めた。人権キャンプといった親睦会を通じて他の日本軍の「慰安婦」生存者に出会うことにより心を開き始めた。また、だんだん水曜デモにも参加するために朝一から急いで仁川からソウルまで来るなど積極性を見せてくれたし、二〇〇三年八月はKBSの『これが人生である』というドキュメンタリーまで撮影した。彼女は、「挺対協からどこかへ行きましょうと誘われた時ほど幸せな時はない」といい、彼女自身が日本軍の「慰安婦」であったことを明かしたり、他の「慰安婦」生存者たちに会ったりすることを遠慮せずに行ったり、「慰安婦」問題の解決のために積極的に闘争する〈運動家〉になっていった。

八万人から二〇万人であると推定されている日本軍の「慰安婦」女性たちのなかで、二〇〇四年四月現在、政府に公式に申告した女性は二一二人であり、今まで出版された五冊の証言集を通じて証言をした女性は六六人のみである。私たちは現在を生きる「慰安婦」生存者の話がある一人の個人史に止まらず、他国で存在感ないままで死んでいった数十万人の「慰安婦」女性の声を代弁していると思う。そのため、私たちは彼女たちが拒否さえしなければ生存しているすべての「慰安婦」女性の物語を記録し歴史化しようとする。吉元玉は私たちのこのような作業の意義を十分理解して、〈証言〉も拒否せずに、むしろ本の出版を待っている。もし『証言集六』になるはずのこの本に彼女の物語が載せられなかったら、『証言集七』を作業しながら誰かが彼女の物語を記録するためにマイクとカメラを突きつけたかもしれない。そして、吉元玉はまたもや「記憶して生きていたら生きてこれなかった」ほどの恐ろしい記憶を引き出すという苦痛を与えられたかもしれない。

私たちは、吉元玉の物語を記録する作業が最初に彼女にインタビューをしたチームメンバーの全面的な責任の下で行われるべきであるとは思わない。むしろそれよりチームメンバー全員が共同責任の下で、この本に載せられるすべての日本軍の「慰安婦」女性たちを共同に再現していると思う。

私たちは口述者と選定する仕事、口述者に会ってきて討論をする作業、テープを起こしたものを読む作業、編集本を作る仕事、編集後記を作成することなどを数十回の公式会で一緒に行い、互いの再現物を矯正しながら共同で完成してきた。したがって、吉元玉をインタビューしたチームメンバーがこの作業を諦めたと言って、私たちまで彼女を諦めてはならないと思った。なぜなら、それは苦悩しながら沈黙を破ってカミングアウトした「慰安婦」生存者の勇気を無視することができないからである。

このようなわけで、私はチームメンバーとの合意の下で二〇〇四年二月に遅れて吉元玉の追加インタビューを行った。追加インタビューは仁川に住んでいる吉元玉が水曜デモ（ソウルの日本大使館前で行っている）に参加するためにソウルにやってきた時に、水曜デモが終わった後に挺対協のシェルターで行った。

インタビューは、主にどうやって満州、中国に行くようになったか、そこで何があったかを集中的に行った。彼女は一三歳という幼い時期に慰安所に行ったためか「大家さんのお婆さんをみると軍人を見て震える以上に怯える」と言い、自分を統制する上長や親がいない環境自体が恐怖になる、つまり子どもの眼差しで当時の苦痛を覚えていた。吉元玉の記憶はひどく毀損されていたので、やはり私たちが満足するほどの〈情報〉を提供してもらえなかったが、それでも私たちは暗黙裡に本の出版のために必要であると思っていた基準までは至ったと考えた。編集本で、最初に吉元玉にインタビューをしたチームメンバーが構成した基本フォームを中心にし、不足する部分を埋めていく方式で再編集を行った。私はもはや吉元玉の物語が歴史の一つとして記録されると信じてやまない。

しかし、再編集された吉元玉の編集本をチームメンバーと議論していく中で紆余曲折が再び始まった。それは吉元玉が二つ目の慰安所に行く時に少なくとも「酒を売って歌も歌う所」ということ

を知って行ったことが、私たちが今まで知ってきた知識、すなわち日本軍の「慰安婦」への動員過程は強制連行や就職詐欺であるということと対峙されるからである。またもや過去二年間の編集会議のたびに話題になった日本軍「慰安婦」のカテゴリーをどこまで捉えれば良いかに関する問題にぶつかった。私たちは今もしばしば攻撃してくる日本の右翼を無視することはできなくて、攻撃の糸口にもなれる吉元玉の話を本に載せることに懐疑的であった。私たちは「吉元玉が日本軍の「慰安婦」というカテゴリーに含まれるのか?」という問題で再び混乱に陥った。

事実、日本軍の「慰安婦」のカテゴリーに対する混乱は、私たちが作業を行っている間にずっと核心の話題であった。「慰安婦」の境界はどこからどこまでであろうか? その境界は誰が作ったのであろうか? 日本政府が「慰安婦」の犯罪を認めてない現実における「慰安婦」の境界は、生存者の証言と植民地時期の資料を基に歴史研究者らが作り上げたものであると考えられる。それなら、初期に証言をした生存者たちは現在の生存者たちとお互いに異なる種類の「慰安婦」ではないはずなのに、なぜ私たちの作業に関わっている口述者たちは、既存の「慰安婦」境界の中に入り込むのがこんなに大変だろうか? このような質問と向かい合って答えを見つけながら、私たちは私たちが逃していた重要なことを発見したが、それは口述者の声であった。

私たちが最初にこの作業を始めた際には、「慰安婦」というあるカテゴリーや枠を決めておいて口述者らにそれを証明できる〈証人〉になってほしいと要請したわけではない。私たちの作業は口述者の声をあげさせ、その声が聞こえるようにすることである。

吉元玉は「今はその話を聞いたから知っている。その当時は「慰安婦」は何か、挺身隊は何か、そういう話を聞いたことがない。そういうことも知らず、獣以下だった」と言う。だが、テレビで「慰安婦」の補償問題が報道され、お金が少ない多いと騒いでいた時、「まさにお金をもらうべきの

人は本当に静かにおとなしくし、さらに恥ずかしくて顔も上げられなかったのに、あんな余計な人ばかり騒いでいる」といい、自分自身の経験を放送に出てくる「慰安婦」の経験と同一線上においた。吉元玉は韓国社会において強制連行や就業詐欺として連れていかれた女性たちのみ「慰安婦」であると名づけられた事実を知らない。彼女は自分の経験を「獣以下」と説明すること以外に、他の言語を持ってなかった。しかし、彼女は韓国社会の性の言説の構造の中で「慰安婦」の経験を恥ずかしく思うどころか、強制連行の有無に関係なく、その「獣以下」の経験が明確に「慰安婦」経験であったと規定している。これは、私たちが日本軍「慰安婦」と考える際、「慰安婦」になる前にどんなに純潔な少女であったか、連行過程がどんなに強制的であったかのみに、問題の焦点を置くべきではない。むしろ、慰安所というところが徹底的に世の中と断絶され統制されたところであるということ、毎日数多くの男に継続的に強かんをされたことに対する情報を、当時の女性たちがどれほど持っていたのかなどの問題に焦点をおくべきであることを示している。吉元玉がたとえ「お酒を売って歌を歌うところ」ということを知って行ったとしても、それが「獣以下」の経験をしなければならない場所であることについては、誰一人からも聞けなかっただろう。そんなに情報がしっかりと遮断されている状態で、「お酒を売って歌を歌うところ」ということを知って行ったということは、何の意味があるのか? 吉元玉の声は〈強制的に連れられた朝鮮人の軍慰安婦〉という公式言説を解体しない限り、聞こえないはずである。

口述者の声が、口述者の話が、個人の経験とは他の方式で構成されてきた公式言説を下から崩していける力を持っていると、私たちは信じている。いまや私たちの作業は口述者の声が聞こえるようにすることを超えて、口述者の声を支持する次元まで広げられた。吉元玉の声は私たちに〈強制的に連れられた朝鮮人軍慰安婦〉というカテゴリーを解体し、あらゆる情報が遮断された状態で

継続された監禁、暴行、強姦など獣以下の経験をしなければならなかったすべての女性たちを含む、新たなカテゴリーを構成しなければならないことを語っている。すなわち、何の情報も持ってなかった当時の女性たちに〈強制〉と〈自発〉という概念の差異は、なんの意味も持たないことを示しているのである。このような吉元玉の声を支持しながら、私たちは吉元玉の話をこの本に一緒に載せたいと思う。

（崔キジャ／テープ起こし：ナ・ジュヒョン、オ・ヨンジュ／翻訳：李麗花）

4 二度も同じ目にあうなんて

――文玉珠（ムンオクチュ）――

●幼い頃

私は一九二四年春、（慶尚北道）大邱（テグ）の大明洞（テミョンドン）で生まれました。「慰安婦」だった時期を除いて、今までずっと大邱に住んでいます。両親の故郷は大邱から少し離れた田舎で、今もそこには親戚たちが暮らしていますが、最近は一度も行ったことがありません。

私がまだ幼かった頃、父は家には時々帰ってくるだけでした。けれども、私が九歳になった年に帰って来て、長患いの末に亡くなりました。母の話によると、父は上海、満州などで独立運動をしていたため、家にも帰って来られず、さんざん苦労した末、病気になって亡くなったのだといいます。私は父が学識のある人だったということをおぼろげに思い出せるだけです。

1924年大邱（テグ）生まれ。8歳の時、独立運動をしていた父が帰宅したが、病気で亡くなる。暮らしむきは楽ではなかったが勉強が好きで、勉強させてやるという親戚について日本に行ったが、女中の仕事ばかりやらされたので、こっそり逃げ帰ったこともある。16歳になった1940年、友だちの家に行ったところを日本の憲兵に捕まり、満州の慰安所に連れて行かれ、そこで慰安婦生活をさせられた。